

——学 会 記——

第1回中国国際リンパ学会印象記

的 場 直 矢

中国への第一歩

1987年5月5日、折からの端午の節句の大阪空港をJAL 793便で飛び立った。これから上海までの飛行予定時間はわずか2時間10分とされ、機内は5割程度の乗客である。五島列島のあたりの島影を垣間みて、東シナ海を覆う厚い雲の上を飛んでいると思ったら、突然雲が切れて、濁った海面が見え、まもなく陸地に入った。見渡す限り青田が広がり、人家は稀で、これで上海附近なのだろうかと思っていると、これまで鳴りをひそめていた中国青年の一团が急にざわめき立ち、笑声や鼻唄まで出る様子であった。ほどなく上海到着のアナウンスがあり、虹橋国際空港に着陸した。パスポートに入国印を押してもらくと、あつという間に空港到着ロビーに押し出されて了った。そこで予期しない事に、上海第9人民医院の若い婦人、楊曉虹さんと季珍さんが、私の名前を書いた小さなカードを持って出迎えてくれた。

中国国産車の「上海」にゆられて、美しい新樹の並木路を上海の中心部へと向った。楊さんは美しい英語を話し、二人とも米国へ行った経験があるとの事であったが、次第に外の人、自転車、車の数が多くなって来ると、それに気を取られ、舌を噛みながらの英会話どころでなくなった。人は歩道から車道に溢れ出し、人も自転車もわれわれの車の直前を平気で渡り、赤信号無視され、車は雑路の中をかきわけかきわけ蛇行し、絶えずクラクションをならしながら、しかも相当の速度で進んでゆく。乗っている方はかなりのショックを受けるのだが、ここの人々はこの混雑の中でうまくバランスを取っているのだと思うに至り少し落ちつきを得た。東洋と古い西洋が雑居している街並の中を、人民服、軍服、赤いセーターやスカート、黒い中折帽にひこずるようなダスターコートを着けた人々が右往左往して、この都市の何とも云え

ないエネルギーを感じた。宿舎に指定された錦江飯店の一室に入ると、今回の会長である上海第二医科大学の張滌生教授夫妻の訪問を受けた。年の頃70歳くらいのどちらかと云うと小柄な、微笑を絶やさない温顔の紳士であった。流暢な英語で歓迎の挨拶を受け、表敬訪問と云う訳であろうか、大変恐縮した。

今年の2月に、突然未知の張先生から、5月に杭州で、第1回中国国際リンパ学会を開く予定なので、夫婦で出席しないか、と云う招待状を受け取った。当時の私の周囲の事情もあり、またリンパ学会とはいささかお門違いの分野でもあり、残念ながらお断りしなければならないと考えていた。1970年にブラッセルで開かれた第3回国際リンパ会議に招かれた事があり、その折現在近畿大学におられる大熊守也先生と知り合いになった事がある。今回の招待については、大熊先生の推薦があった事を知り、また未知の中国に対する興味は深々たるものがあり、結局単身で行くと返事をした。その後日本からの出席者は名古屋市大外科の正岡教授と云うことを報られ、連絡して同道させて頂く事にしていたが、出発直前になり正岡先生の急な御都合により、私だけと云う事になって了った。しかし杭州に行ってみると、東京医科歯科の佐藤達夫先生（解剖学）と東邦大学の林三進先生夫妻（放射線科）が来ておられた、佐藤先生はかつて東北大学の解剖学の助教授として仙台に住んでいた事があり、当時面識こそなかったが、奥さんは旧病院時代に歯科医として仙台市立病院に勤務しておられた事があり名を知っていた。また林先生は17年前ブラッセルで知り合った中である。こんな訳で少しほっとして、その後行動を共にした。

翌日5月6日午前中は、張教授を訪ねて第9人民医院に行き、午後は張教授の案内で数名のヨ-

ロッパ人とともに、列車で杭州に向った。特快列車で3時間くらいとの事であったが、上海駅の発車が遅れ、また途中の停車時間も長びいたりして、結局は6時間くらいはかかっただろう。あとで聞いた所では、当時東北地方で、大山火事があり、その救護活動のため列車ダイヤが大巾に乱れていたらしい。杭州までの途中は広大な水田地帯が拡がり、丁度田植中の所もあり、天秤棒を担った人がいたり、菜の花が咲いていたりして、石や泥で作った農家を除いては、日本と似たような田園風景であった。やがて桑畑が多くなり、杭州に着いた。

杭州は美しい西湖に面した町で、蘇東坡、李白の故事があり、北宗の古都でもあり、江戸時代の文人墨客の空想を掻きたてた名勝地である。西湖(シーフー)は別名西施(子)湖とも云うが、われわれの宿舎は杭州郊外の西湖につき出た広大な庭園の中にある杭州市政府西子賓館であった。はるかに離れた門では衛兵が拳手の敬礼をして迎え入れる。緑の滴るような樹木と芝生にかこまれた庭の中に、中国風のがっちりした建物が散在し、その一つが宿舎と学会場となっている(写真1)。湖畔には柳の並木があり(写真2)、ときどき衛兵がゆっくりと散歩路を往き来し、たえず白い綿のような柳絮が飛んでいる。まことに悠々たる、美しい風光ではあるが、ここで四晩を過し、幽閑という言葉も浮んで、はなはだ申し訳ないと思う。宿舎の部屋割りが済んでから、すっかり暮れて了った庭内の別棟で歓迎レセプションが行われた。各人ツインの部屋を割り当てられたが、部屋にキーがなく少し気になった。しかしここでは施錠は不必要なのであった。

杭州国際リンパ学検討会

この学会は中国語で表記のように書かれていた。5月7日8時30分より西子賓館のロビーでオープニング・セレモニーが始まった(写真3)。まず張会長の挨拶で始まったが、中国でリンパ学が組織されたのは極く歴史も浅いが、中国ではフィラリア症の汚染地帯をかかえ、患者も数百万人と推定されている。このためリンパ系に関する研究には、多大の関心を持たれ、この領田の開発、発展のため国際的交流が切に望まれると云う、熱意

あるとともに謙虚な発言で、多くの参会者の共感を得た。終ってすぐ休憩に入り、玄関前で記念撮影が行われた。全体に会の運営はゆったりしたものであったが、最終的なプログラムは始まってからも適宜変ってゆき、私の発表も、時間など寸前まで解からず、前夜講演10分、討論2分と云う事で、急遽原稿を短縮したため、後半スライドと合わなくなり多少とちって了った。始まってみると青ランプ、赤ランプ、ブザーに追われる事もなく、外国からの演者はスライドを説明しながらかなり自由に時間を費して講演した。このため中国側の発表は、少し遠慮させられた面もあったりではなかったかと思われた。しかしこの学会の目的は、長老である張教授が、自国の後進達に国際的視野を開かせ、学問の交流に対する啓蒙にもあるのではないかと感じられた。

リンパ学は、日本でも世界でも新しい横割りの領田であり、リンパ系の基礎、臨床を含めた研究体系である。したがって今回の報告もリンパ系の関与する免疫学、形態学、生理学、臨床など多岐に渡っていた。私はとくに外科医としてリンパ浮腫の治療、リンパ管に関する顕微外科(microsurgery)の問題などに興味を持った。

リンパ浮腫の治療に関しては、理学療法とマイクロサージャリーの二面で最近の進歩がみられる。張教授らはリンパ浮腫の温熱療法と超短波療法のすぐれた効果について報告した。これらの治療の実際については、後に第9人民医院で精しく見聞した。温熱療法は保育器に似たchamberに患肢をすっぽり入れ、室内を80~90℃にして治療が行われる。治療中に体温が0.5~1.0℃上昇し、発汗するのが欠点である。これに対して超短波療法は、同様のChamherに12.5 GHzの発振装置を2個いれ、室温を上昇させず、組織内温度だけを39~40℃に上昇させるものである。1回30分間で15回をもって1クールとし、約2ヶ月の休止時間をおいて、必要に応じて次のクールを行う。休止期間は昼間だけ弾力懐帯を施す。張らによればこの治療を行った85例中1クールで35.8%、2クールで46.4%、3クールで61.1%のリンパ浮腫の消失がみられたと云う。また全体として100%に何

らかの特効性が観察され、75%に著明な効果があったと報じている。効果の判定は患肢の周囲の長さ、体積の減少を目標に判定され、また患肢の丹毒様感染の頻度減少からも評価されている。

この他四肢のリンパ浮腫に対する顕微外科的手術方法について中国およびヨーロッパより報告が行われた。ミュンヘンのBaumeisterはリンパ管の吻合、自家移植を行い、最短4年間の経過観察で60%の有効率をあげている。またこれらの有効例にリンパシンチグラフィーを行い、移植リンパ管の開存を証明している。またミラノのFoxは、リンパ管と静脈の間にリンパ管移植を行って治療している。また広州からもリンパ管静脈吻合、リンパ管の切除と端々吻合などについて報告があった。

この他Casley-Smith（オーストラリア）Olszewski（ポーランド）、Borberg（スウェーデン）、Sevelle（フランス）などより発表が行われた。日本からは、佐藤が外科手術に必要な肝、胆、脾のリンパ系の局所解剖学的研究、林はリンパ造影法による癌リンパ節転機診断の限界として、男性性器癌の術前リンフォグラムと、摘出標本の軟線撮影像、組織像を対比して論じた。私は甲状腺リンパ造影法のその後の検討について報告した。本法は初めて学会に報告した頃には、甲状腺癌の補助的診断法として大いに注目されたが、最近では超音波診断法や穿刺吸引細胞診がもっとも有効な手段として普及したため、ルーチンの検査からははずれてきた。しかし、後日北京に行った所、ある朝私の来訪を聞いたからと云って日中交友病院の医師と日本語の解かる事務長と云う人が、宿舎の華都飯店に訪ねてきた。実は甲状腺リンパ造影を行っているので、来て指導してくれないかとの事であった。情報伝達の速さに驚くとともに、この方法は、レントゲン器械さえあればどこでも簡単に行える方法なので、中国ではまだまだ使ってもらえる方法かも知れないと思った。残念ながら滞在日数が少く、スケジュールが混んでいたで、日中友好病院の訪問は果せなかった。

5月8日の昼で予定を全部終了し、午後は杭州近郊の観光を行い、若葉に輝く西湖の風光を満喫

した。

上海第9人民医院

5月12日杭州で一しょだった人達と第9人民医院を訪問した。私にとって二度目であるが、地図がないので、一体上海のどのあたりにあるのか一向に見当がつかない。ただ車で何時も雑踏している街をぐるぐる曲って、最後に横町のような所に入ったつき当りとしか解らない。門を入り右に曲がって行くと、この病院で一番新しそうな6階建の整復外科大楼の玄関に付く。建物の前には池のある中庭で、入口に白い石の白衣の天使像がある（写真4）。まず1階の応接室で、張教授（写真5）と杭州で顔見知りになったスタッフの歓迎を受け、病院の説明を受けた。第9人民医院は、上海第2医科大学の5つある教育病院の一つで、総合病院として750床を持つ。それぞれの教育病院は機能的な特徴を持っている。この病院は胃腸科、口腔外科、形成外科を特色としている。またこのビルは、一階に外来治療室、2階は手術室、3階は骨科（整形外科）、4階は手の外科、5階はcraniomaxillary surgery、6階は形成外科である。私にとって日本では普段あまり馴染みのない分野である。建物全体としては、やや武骨ではあるが、天井が高く堂々としており、余計な人や器具がなく簡潔な感じである。若干の注意書や標語のようなものが貼られてあるが、目障りと云うほどではない。日本人には何とか判読出来るが、例の新漢字が多いので判じもののような所もあった。一階は治療室で、学会の項に書いたようなリンパ浮腫の患者が大勢温治療を受けていた。患者は安楽椅子に座って、腕や下肢などを治療器に入れて、静かに読書などしながら治療を受けていた（写真6）。また隣の部屋では超短波治療が行われていた（写真7）。壁には治療前後の脚の写真などが貼られ、患者が見得ようになっている。一人一人に張先生が中国語でやさしく声を掛けてるのが印象的であった。

エレベーターで病棟に上る。エレベーターは二基のうち一基が動いているようで、高い木の椅子に坐った小母さんが運転する。本や茶のポット、茶碗など持ち込みである。各病棟には看護室と医師



写真1. 会場となった杭州市政府西子賓館。



写真2. 西子賓館の庭より西湖を見る。



写真3. 学会場



写真4. 上海第9人民医院整復外科大楼入口。



写真5. 病棟を回診する張滌生教授

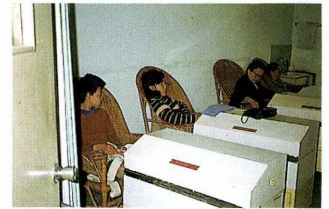


写真6. 四肢リンパ浮腫に対する温熱療法。



写真7. 超短波治療室



写真8. 看護室



写真9. 手術室

控室のような所があるが余計なものは何もない。全部でこの建物には170床あり36名の医師が働いているとの事であったが、地方から多勢の医師が研修にきているそうである。ほとんど装飾品はないが、看護室の壁に、金文字に金の縁取りをした赤い大旛が掛けられている。入院患者より医療陣への感謝の印と受け止められた(写真8)。

6階の形成外科病棟の入口は施錠され、これは患者に対する配慮と思われた。熱傷のひどい瘢痕、顔面半側萎縮症、耳、鼻、眼瞼の欠損などが主として微小血管吻合にある遊離皮膚・筋弁移植により治療が行われている。陰茎欠損に対して尿道と陰茎の再建が行われた患者もいた。中々よい形をしており、心棒に肋軟骨が植えられていると云う、芸の細いところが見られた。手の外科でも、手指欠損、乏指症などに趾指の移植を行い、第1指、2指などの再建が行われている。これらの手術は無

論日本でも行われているが、中国では患者が集中的に集まるために、極めて症例が多い様子であった。食道に対する遊離腸管移植もここで行われている。中国人は微細な細工など注目すべきものがあり、顕微外科にも向いているような気がした。この技術は日本でも各外科領土の一つの方向を示すもので、若い眼のよい専門家達の出現が望まれる。

手術室は2階に8室あり、毎日20~30の手術が行われているとの事である。麻酔器は非常に少く、われわれの見た所では大型の麻酔器用いて開胸手術が行われている一室のみに見られた。一室では手術台をならべて兎唇の手術が行われていたが、麻酔はケタラルを用いているとの事であった。患児はほとんど外来で、術後3時間程休んで帰宅するとの事である(写真9)。

北京へ

上海での全日程を終り、国外からの参加者は西

安を経て北京に行き帰国と云う予定だが、キャンセルが多かったらしく、結局日本人3名、フランス人夫妻、イタリー人2名、スウェーデン人1名の8名になって了った。共通語は英語だけで疲れる旅行であったが、日を重ねるに従って、お互の友情も深まり。得難い思い出となった。西安、北京では現地の旅行社の人がついたが、英語も巧く熱心な人たちであった。ただ各地の旅行社の間で必ずしも連絡がうまくとれなかった様子で、ホテルの部屋の割増金を出すように云われ、若干のトラブルがあった。流石一人一人出発前に中国側からもらった手紙のコピーを持っていたのでそれを示し交渉して約束通りにしてもらった。こう云う時に一番活躍したのはイタリー人のFox氏で、「私たちはあなたがたの親切な案内や心から感謝している。しかし私たちの持っている手紙によれば……」と云う論法で、空港まで金をとりに追って来た数名の男を、粘り強く撃退した。日本人ならどうせ大した金額でもないからと面倒臭くなって、若干の金を拂って解決してうかも知れない。

旅行中はそれぞれのお国振りを遺憾なく発揮して興味があった。

食物に関しては、毎日昼、夜は十数種の中国料理であったが、全般に味付は意外に淡泊で、材料も豊富で、日本勢はすっかり堪能したが、ヨーロッパ人は次第に豚肉と鶏以外に手を出さなくなった。とくにフランス人はパリの中国料理の方がはるかに旨いと云い、一寸珍しいものはほとんどパスしていた。しかし西安で食べた32種類の餃子と、北京の聚徳烤鴨店のペキンダックなどは全員が大喜びであった。

古代の日本に大きな文化をもたらした西安には、殊更魅かれるものがあった。日本文化の根元の遺蹟がそこにあった。しかも長い歴史の中で、日本人は中国の影響をすっかり日本的に変容している。中国と日本の風土には根本的な違いがあるように思われた。

5月18日北京から帰国の途中についた。

(昭和62年12月7日 受理)